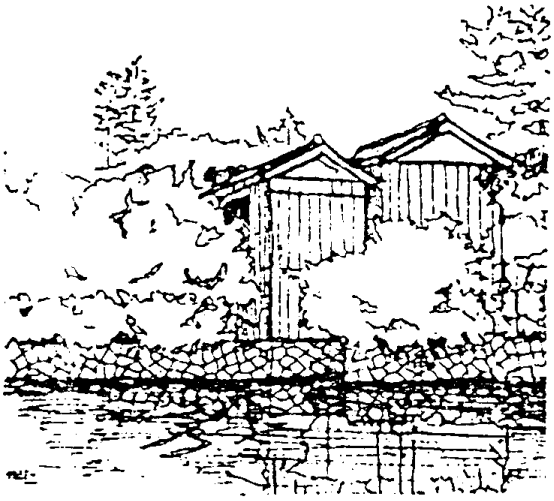
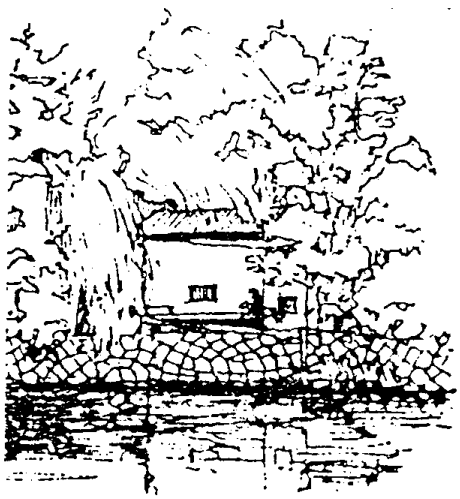
巻之参

港町残照





もくじ

壹 町並み保存と町づくり ……66
(1) 玉島町並み保存地区 ……67
(2) 良寛たうん ……68
(3) 玉島歴史民俗海洋資料館 ……69

弐 旧新町問屋街
(1) 西国屋土蔵と旧新町問屋街案内 ……70
補足資料 ― 新町問屋街の変遷 ……71
(2) 久米屋土蔵と玉島信用金庫西支店 ……73
(3) 米屋三宅と向三宅 ……74
㋐ 米屋三宅の由来 ㋑ 向三宅家の景観
㋒ 三宅對鴎と茶室
補足資料 ― 新町に集中した銀行の興亡略記 ……76
(4) 西綿屋と中原周華 ……77
風流を好んだ湊の旦那衆 船着場を持つ町屋
補足資料 ― 玉島の茶くと藪内流 ……78
(5) 大国屋と川田襄江 (6) 若屋と玉美人記念館 ……81
参考資料 ― 旧新町問屋街旧跡 ……84

参 矢出町 西爽亭 ……85
平成の改修工事 西爽亭 玉島騒動顛末記
参考資料 ― 備中玉島へそまつり外 ……90

写真上…… 倉敷市玉島町並み保存地区（指定趣意の掲示板）

写真下… 良寛たうん ―昔が聞こえる港町―
（町づくり呼びかけの掲示板）

ともに玉島歴史民俗海洋資料館東駐車場に設置…… 保存地区掲示板は目につきにくい。

～港町残照についての詳細は玉島今昔物語下巻158ページ玉島風物詩抄録を参照～

壱　町並み保存と町づくり

(1) 玉島町並み保存地区

平成七年九月　岡山県知事より町並み保存地区としてこの「玉島地区」が指定されました。県下で八番目　市内では「下津井地区」に続くものです。

この一帯は　十七世紀の中頃（江戸時代初期）から築かれた堤防（土手町及新町）を中心として　高瀬通しによる高梁川流域の物資の集散地として　また西国航路の拠点として栄えた港町です。

こうした往時の繁栄の様子は　数多く残っている出籠窓や格子のある本瓦葺き塗屋造りの商家やなまこ壁のある土蔵造りの蔵から偲ばれます。

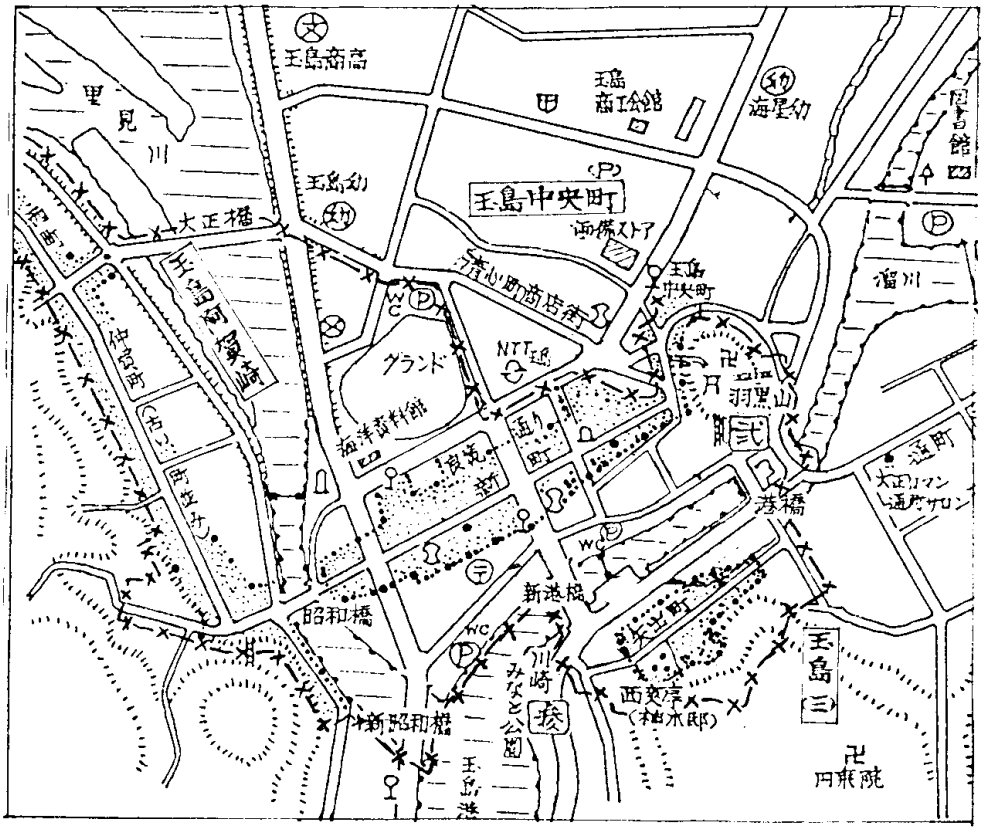
また　こうした建物が建ち並ぶ町並みは　今でも背後の山の緑や水辺の景観に調和し　優れた歴史的景観を形成しています。

保存地区は約二十一ヘクタールですが　そのうち玉島阿賀崎（西町・仲買町）　玉島中央一丁目（新町）　玉島三丁目（矢出町）の三地区にわたる約五ヘクタールは特に伝統的な町並みが残っており「町並み重点整備地区」に指定されています。

この「町並み重点整備地区」内では　家屋及び付属工作物などを修理・修景する場合に　一定の基準により補助金を受けられる制度も設置されています。

この町並み保存地区としての指定を新たな出発点として　先人の方々が育んできた貴重な歴史的景観を後世に伝えていくため　住民の方々と共に歩き続けます。

―倉敷市―



玉島町並み保存地区図

周辺景観保存地区
町並み重点整備地区

(2) 良寛たうん ◆昔が聞こえる港町◆

玉島は 寛永十九年(一六四二年) 備中松山城主となった水谷勝隆以降三代にわたり推し進められた干拓により今日の基礎が築かれました。

当時は 玉島港は『室(兵庫県)は東に赤間(山口県)は西に 玉島港はまん中に』と歌われ瀬戸内海交通の要として発展していました。

またその港を形作っている矢出町 港町 新町 仲買町は日本各地の産物の集積する問屋街として栄えていました。 今でもこの地区にはどっしりとした商家や白壁の土蔵が立ち並び往時を彷彿とさせてくれます。

私たちはこの旧問屋街一帯の『町並み保存』を中心とした新玉島文化ゾーン(良寛たうん) の実現をまちづくりへの第一歩として提案いたします。

あの天真自由無碍な良寛さまのこころで子供たちに誇れる『わが町玉島』のまちづくりを推進しましょう。

一九九一年(平成三年) 五月

玉島地域振興推進協議会

社団法人玉島青年会議所

(3) 玉島歴史民俗海洋資料館

(ア)生活のにおいが伝わる資料館

鉄骨二階建て延べ約五百平方㍍の旧玉島図書館を活用。 平成三年十一月から約千三百万円をかけて内装を改修。 倉敷地区海運組合が長年収集した海洋関係資料約五百点、乙島文化財保存会収集の農具・漁具・民具など約七百点の計千二百点を収蔵。 常時三百五十点の展示と解説板の取り付けなどの準備を進め、平成四年五月十六日開館し一般に公開。

(イ)町づくり・観光玉島の発信基地

平成六年一月、玉島文化協会・玉島商工会議所の有志十三人で「玉島観光ガイド協会」を設立。県のウエルカムガイド制度を活用し、観光客に玉島の名所・史跡などを紹介する活動を開始。

事務局を資料館に置き「観光案内所」の看板も掲げ、観光客の要請に応じて出向く。

――点在する名所・史跡をめぐるコースの設定、道しるべや説明板、さらには観光案内板などの設置。必要に応じては、貸自転車の用意などなど……ぶらり気軽に見て歩く町づくりへ夢はふくらむ!

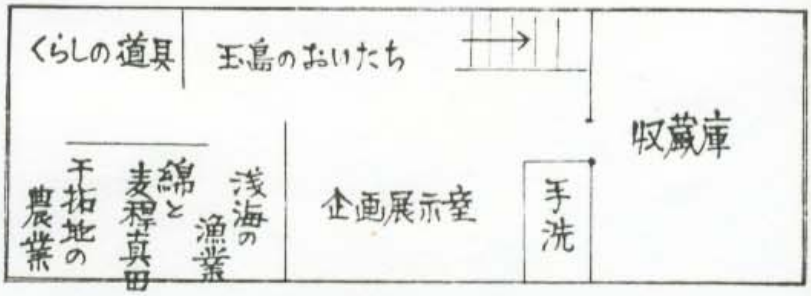
2階の常設展示
—歴史民俗資料室—

玉島地方で日常使用のくらしの道具をはじめ、綿稲・麦などの干拓地の農業に使われた農耕具。

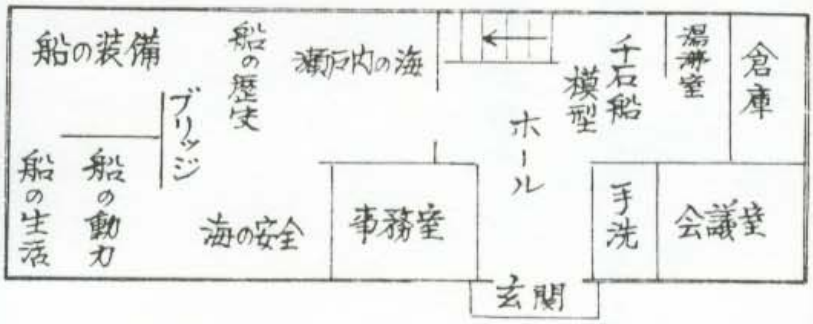
明治から大正にかけて農家で盛んに生産された麦稈真田の器具などの展示。

また玉島周辺の遠浅の海で行われていた海苔や貝の養殖に使われた道具。打瀬網などの漁業関係の資料も展示。

開館当時のパンフレットによる



▶ 玉島歴史民俗海洋資料館平面図〔上図2階・下図1階〕



1階の常設展示 — 海洋資料室 —

江戸から明治・現在にかけての港や船のうつりかわりの紹介。ブリッジ(艦橋)で実際に使用されていた羅針盤などの装置や救命用具など船に装備されたいろいろな道具の展示

1階ホールには 千石船(弁財船)の10分の1の精巧な模型(約3m)も展示

玉島歴史民俗海洋資料館

弐 旧新町問屋街

(1) 西国屋土蔵（写真上）
と旧新町問屋街案内
の看板（写真下）

〔看板は写真上のオートバイの右奥に設置〕

▲西国屋土蔵▼

内側が平瓦を張ったなまこ壁で他に例をみない。また雨が降っても荷役ができるように大きな庇屋根が取り付けられているのも珍しい。

江戸時代中頃 円通寺の金仏様（青銅露坐地蔵菩薩像）を寄進した西国屋萱谷半十郎がいた。

〔円通寺金仏様・西国屋萱谷氏については玉島むかし昔物語 97～98ページ参照〕

〔補足資料〕新町問屋街の変遷

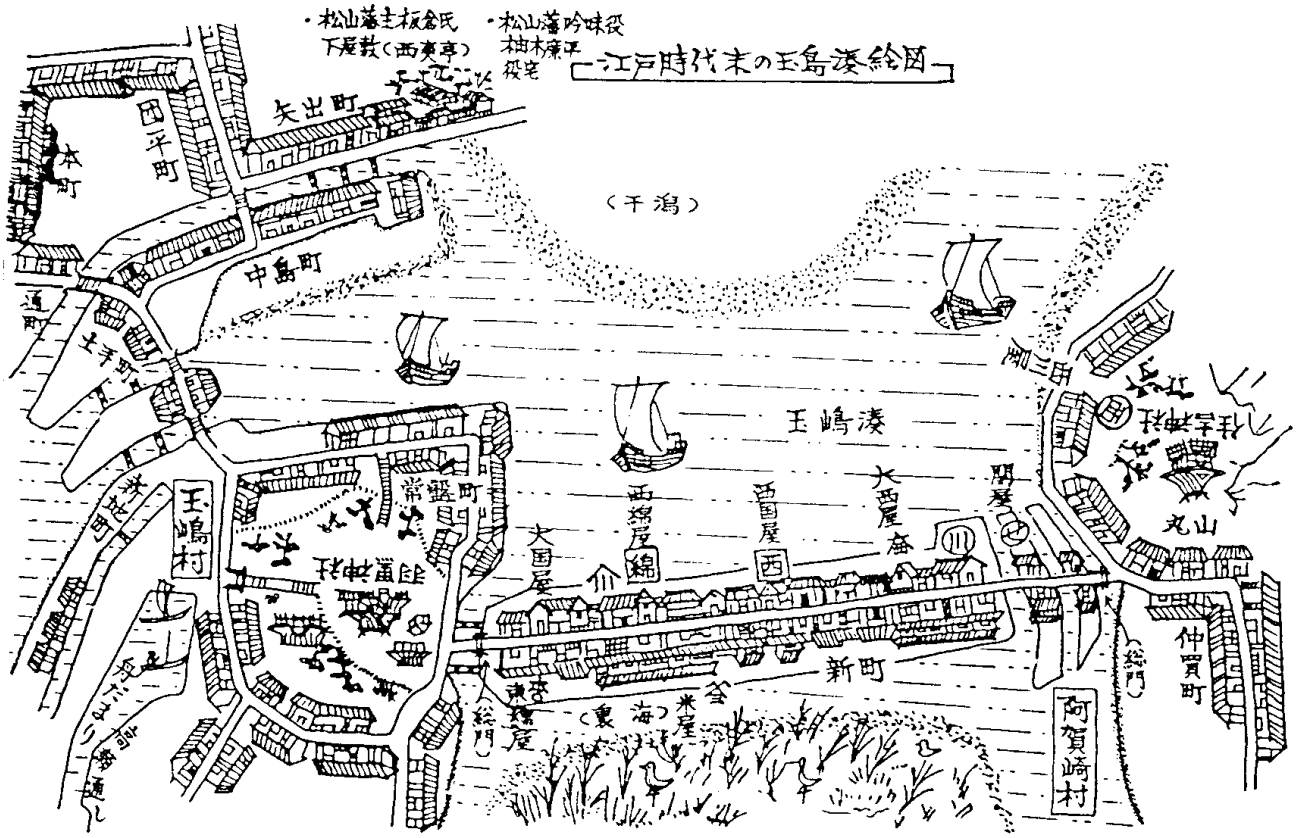
かつては渦の七瀬戸と呼ばれ潮流のはげしい難所であったといわれ、難工事の末に八年の歳月を費やして寛文十一年（一六七一）に新町の土手が完成。

堤防の長さ三九一㍍・堤防上部の幅五三㍍。堤防の底幅や高さは不明だが、底幅は少なくとも上部の数倍高さも一〇㍍前後と推定され、頑丈に造られた。

造成用の土砂はすべて港の底を掘り下げた土砂でまかなったといわれている。

新田開発工事の終了が寛文十二年。鍬下五年後の延宝四年（一六七六）検地・石高付けを経て阿賀崎新田村が誕生。　このころ初代庄屋菊池重右衛門は新町土手に町づくりを考え、土手の中央に道路を通し、道の北側を湊問屋の屋敷地に、道の南側は港に面した蔵屋敷地として、雁木を設けて千石船が横付けできるようにして、船の積荷を直かに蔵へ運び入れやすくする。　また屋敷地には山土を入れて嵩上げ整地をすれば土手の補強にもなると、計画意見書を松山藩へ差出し許可を得て町づくりを始めたという。

道路北側の屋敷地割は間口五間（約一〇㍍）奥行十間のほゞ一定した規格の長方形であったという。そして道に面して妻入り屋根の格構をつけた商家が建ち並んでいった。　表口は店の間、その奥に居間と中庭、さ

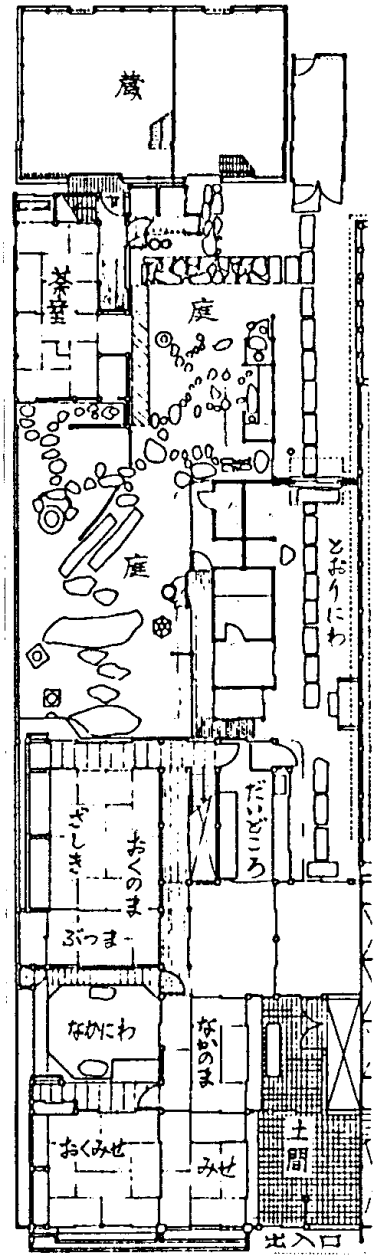


らに奥へ使用人の部屋や蔵へと続く片側間取り…俗に「うなぎの寝床」と称される構造となっていた。　大店ともなるとさらに道をへだてた向い側に大きな土蔵を建て、船から直かに積荷を運びこむことができるようにした。

土手に問屋街が完成したのは元禄年間（一六八～一七〇三）の中頃であったといわれ、四三軒（一部南町を含む）もの問屋が軒を連ね隆盛を誇った。

新町の名の由来は、矢出町、土手町、通町など早くから発達した、いわゆる東浜の港町に対して新興の港町という意識がいつしか地名となって定

伝統的町屋では、表から裏へ抜ける「とおりにわ」に並行して、表が二列二室に続いて奥の間・台所など、さらに茶の湯の発達で茶室の機能をもった、離れ座敷が最奥に造られるようになった。また、江戸時代には二階を座敷にすることが許されず、軒の高さが低い表側だけの厨子二階に制限されていた。

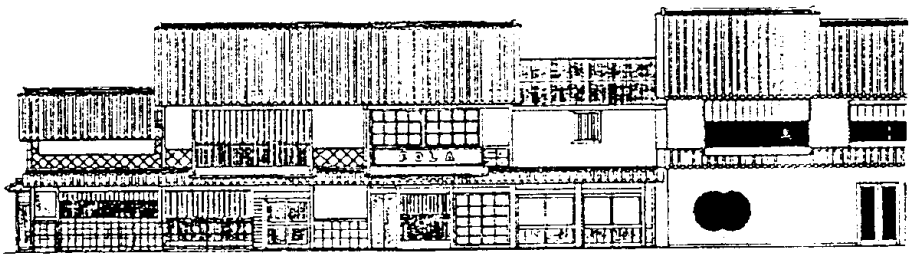


上図は若屋一階平面図
下図は立面図

若屋
江戸時代中期（一八〇〇年頃）の建物で穀物等を扱う店舗として使用されていた。新町では最古の建物で当時の佇がよく保存されている。
（新町ルネッサンス振興会）

着したものである。

しかし江戸時代終りごろには問屋も僅かに一三軒と減少し衰退がみられるようになり、さらに現在では南北道路によって分断されたり、空地や駐車場が目立つようになった。



若屋表外観　　ポーラ化粧店　　スナック苑 外観

(2) 久米屋土蔵と玉島信用金庫西支店の赤レンガ造り

写真の手前が旧久米屋の土蔵
赤レンガの建物が玉島信用金庫西支店で、大正時代の終り安田銀行玉島支店の時の新築といわれる。

久米屋

現在は高杉家具店として道路北側に店があり、土蔵はその物置となっている。写真の久米屋案内板は土蔵入口の軒下につるしてあるので、見上るようにしないと目につきにくい。

明治期には「高杉三荘」陶器宇治茶・諸道具・書画、「高杉嘉平」呉服・太物・足袋・判綿等の看板を掲げて商売繁昌。

明治後期には「にしん粕」の魚肥問屋として繁栄し、多くの使用人が着物に股引き姿に半天をはおり足は足袋にわらじばきのいでたちで、海岸沿いの倉庫から力マスにはいった魚肥を猫車や荷車に積んで配達に出掛ける活気に充ちた店頭風景の古い写真から、当時の様子をうかがい知ることができる。

(3) 米屋三宅と向三宅

[写真上] 米屋……江戸時代中期(1780年頃)の建物で廻船問屋の店舗として使用された。大正年間に星島銀行・加島銀行の時、表は石造りの柱となり鉄格子のいかめしい外形を見せており当時のまま残されている。(新町ルネッサンス振興会)

[写真下] 向三宅……天保3年(1832)建造の家屋で米屋の分家として作られた。それまでこの町筋の海側には全く民家は無く、200棟を越える土蔵群が軒を連ねていた。(新町ルネッサンス振興会)

‖新町ルネッサンス振興会により主な旧問屋の表格子に久米屋と同じような家型案内板がつけられている‖

㋐「米屋三宅」の由来

連島矢柄村の庄屋三宅氏の分家として江戸初期に矢柄で独立。　三代目の時、連島西之浦中町に移住し回漕業と新田開発で家を興す。

四代目三宅伊左衛門高雅の時、天明の大飢饉の際（一七八五年頃）庶民救済のため米を安く売って喜ばれ、人呼んで「米屋」と称するようになり屋号となったという。

玉島米屋三宅は四代目高雅の叔父安兵衛が分家して、江戸中期に阿賀崎村新町に移住し回船業を始めたのに始まる。

一方、連島西之浦中町の古庄屋で生魚問屋を営む富島屋三宅氏が旧家を誇り、その中の一人「半十郎親純」が時を同じくするように江戸中期に玉島西回屋萱谷氏を継いだ。　かくして連島西之浦両三宅が玉島でも競うこととなり、後進の三宅は屋号米屋を冠して「米屋三宅」と称するようになったという。

＝連島両三宅氏については　玉島今昔物語上巻138ページ外参照＝

㋑向三宅邸の景観

南側の回船問屋の土蔵三棟を取っ払って建てられた商売をしない住居専用の町屋（仕舞屋（しもたや）ともいう）。通りの喧騒を避けるために通りから一間程奥まって建てられている。　平入り厨子二階・黒漆喰壁と出籠窓。一階に仕舞屋格子（完全に取り外しができる造り）。

㋒三宅對鴎と茶室「西園」（西遠）

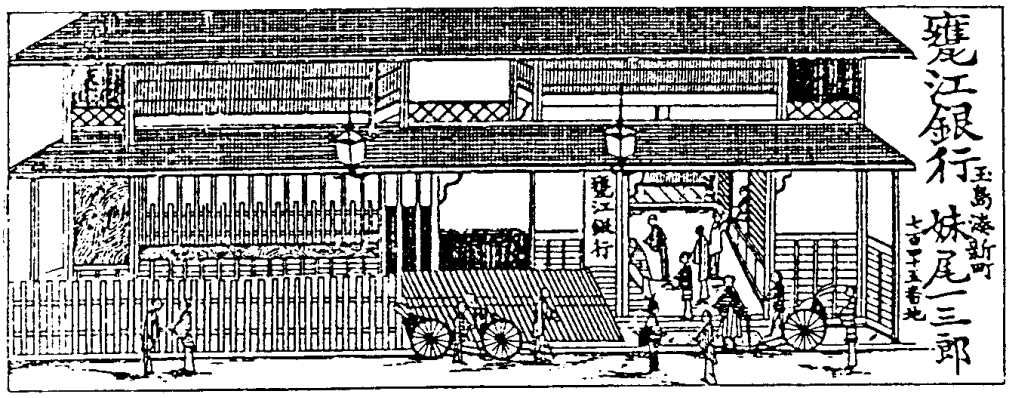
文化年間（一八〇四～一七）玉島米屋三宅氏の二男？として生まれる。名を高炳、通称安八郎。号を對鴎・米翁と称した。

茶道を好み藪内流に精通し目録相伝を得た茶人の一人。　藪内家十代竹翠が命名した茶室「西園」が屋敷内にあると伝えられる。

また連島米屋三宅氏の西浦（辰蔵高哲）について、介石（紀州の野呂介石）風の絵画を習得し絵にも秀で、当時の風流文化人の一人でもあった。

對鴎の妹操子（おそう）は勤王の志士といわれた連島米屋三宅氏の定太郎高幸の妻となり家を支えたという。

※操子……賢夫人で和歌に長じ、家政に専念し、高幸の入獄後はよく困苦と闘い、家を守ったという。



旧大西屋本家（妹尾氏）店舗使用…現在スナック苑…一階は改装されて面影とどめず、二階にわずかに姿をとどめる

補足資料▼新町に集中した銀行の興亡略記▲

①第二十二国立銀行玉島支店〔下図〕開設（明治11年）
〔明治10年全国で22番めに岡山（開業した地方発券銀行の支店〕
⇐ 安田財閥に吸収
。安田銀行玉島支店（大正12年）〔この時赤レンガの建物新築〕
⇐ 富士銀行玉島支店を経て
。玉島信用金庫本店（昭和28年）〔仲買町から移転営業〕
⇐ 本店が旧国道2号沿いへ新築移転
。玉島信用金庫西支店（昭和44年）〔本店跡〕

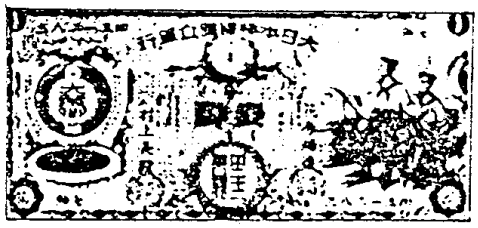
②甕江銀行〔上図〕開設（明治13年）----〔合併大正9年〕

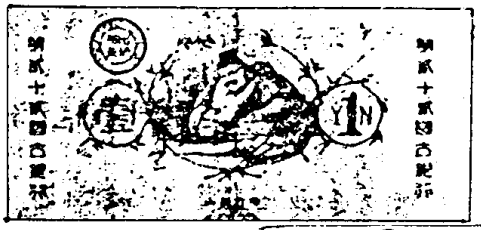
③玉島銀行開設（明治27年）
〔現中国銀行玉島支店の位置〕
第一合同銀行
〔中核、倉敷銀行〕
〔合併 大正12年〕

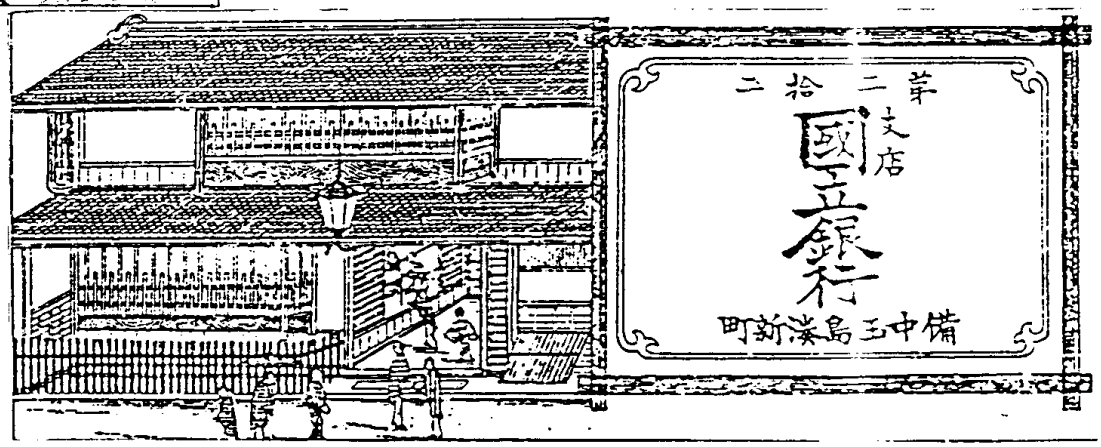
④加島銀行玉島支店開設（大正7年）
〔米屋三宅の店舗使用〕

▼第一合同銀行を中核に備中地域の銀行統合を進め、作州地域の銀行統合を進めてきた山陽銀行と合併し、昭和5年中国銀行を新設。

⑤中国銀行玉島支店開設
（昭和5年）
〔玉島銀行跡に現在の建物新築〕

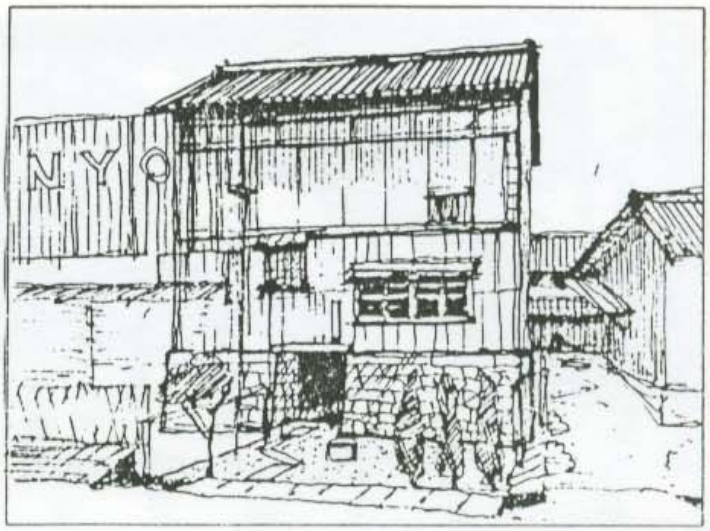






〔上〕二十二国立銀行発行の一円紙幣（上が表、下が裏）政府発行の紙幣と同じ価値・信用で通用した。

玉島に初めて出現した銀行（P.73写真・玉島信用金庫西支店の位置に開設）



▶ 船着場を持つ町屋

米屋・西綿屋の裏手(北側)、現在は良覚通りに面するが、江戸時代から昭和20年代までは裏川と称され、清心町・玉商グランドを含めた広い範囲にわたって游水池が広がっていた。

明治以降は葭の生い茂る湿地帯と化し、そのまま水路が通り高瀬通し舟だまりから羽黒山北辺をめぐり、新町土手北側に沿って昭和水門へ抜ける水路があった。

上の絵の二階屋は現在清心書院(渡辺家)となっているが階下は石垣を築き出入口や南の店に通じる通路が作られ、昔日の面影を今に残した、かつての高瀬舟の船着場であった。

補足資料 ▼玉島の茶人と薮内流▲

㋐幕末・明治の三茶人

㋑西国屋・蔓谷半十郎(号寿仙・竹芝)安政元年(一八五四)薮内流目録相伝店に茶室を設け、隠居所(場所不明)に家元の茶室「雲脚」を写した「遠庵」(薮内家十代竹翠命名という)の茶室があったという。

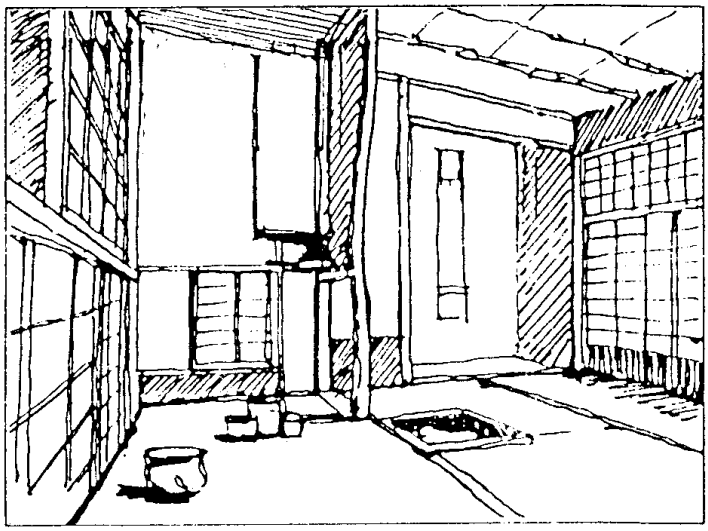
写真は向三宅邸とその東角の石田歯科医院との間で蔵と蔵とにはさまれるように狭い通路がある。静かなたたずまいの通路の奥まった所に屋敷が広がり、茶室「西園」が保存されているという。

⑥水屋・三宅安八郎（号對鴎・米翁）
安政元年（一八五四）藪内流目録相伝
藪内家十代竹翠命名の茶室「西園」がある。
もと阿賀崎丸山の高運寺の近隣に江戸末期に建てられたものを大正年間に三宅家へ移築したという。

⑦柚木廉平（方啓）（号竹叟・茶名紹啓）
明治二五年（一八九二）藪内流免許皆伝
父の弥兼（号玉嶼）は文政八年（一八二五）に藪内流に入門し茶道を楽しみ、度々茶宴を開き友達を呼び集めては楽しんだという。
茶室には「澆花園」（別邸・団平町にあり後に甕港座となった）「西爽亭」「洛園」があった。

②町屋の茶室―町中に多くの茶室があり珍しい―
主なものを列挙すると、
○町屋を改築して茶室を作ったもの―天満町安藤家・幸町小林家……主屋の座敷に炉を切った八畳又は六畳の書院風茶室・幸町？小野家…三畳台目草庵風茶室。仲買町香西家…主屋二階に四畳半草庵風茶室。
○新たに茶室を作ったもの―矢出町池田家・新町山本家※……茶室というより広間・小間・水屋・待合などを含めた茶を嗜むための一連の空間の創出。南町備後屋…地元の茶人の手で建てられ、客を楽しませる草庵風茶室。
など明治以降庶民の間に広がり地方色豊かな茶事の雰囲気を創り出した。

※（72ページ旧若屋平面図参照）



茶室（「半日庵」）内部スケッチ画
旧西綿屋（現仁科家）に伝わる茶室半日庵は織部感覚にもとづく燕庵形式を継ぐものとされ、もとは明治初めに阿賀崎丸山高運寺近くに建てられていたものを、大正年間に移築したものという。

③玉島に影響を与えた茶の道
江戸末期寛政十二年（一八〇〇）阿賀崎丸山に真宗本願寺派功徳山高運寺が建立されてから玉島に藪内流の茶が広まったといわれる。
そして文化年間（一八〇四～一七）には裕福な玉島商人

の多くが藪内流に入門して茶を楽しんでいる。

安土桃山時代の茶人古田織部の妹を妻とした初代藪内紹智（剣仲・燕庵などと号す）に始まり、大きく明確な動作による作法などから武士階級に支持され、茶室もまた政治や経済上の密約の場などとしての社交性をも持っており、千利休がいう個人的な精神修養の場――わび・さびを追求する最小限の空間という茶室の概念とは全く異なっていた。

玉島の裕福な商人たちは趣味や社交手段として茶事を楽しむという意識が、形式にとらわれない奔放・磊落な武士の気概にひかれていったものと考えられる。

従って玉島の茶室も空間が広く開口部も大きくて内部も明るい。江戸期のものを写した茶室は四畳半が大半で「にじり口」が無く、縁側には一面全体を障子にした「貴人口」を設けている。さらに窓を多く作ったり開口部を大きく取って海や川の眺望を取り入れるという、自然に挑み、それを我がものにせんとする意欲に充ちた茶室というのが特色となっているという。

藪内流を通して織部好みと称される意匠が随所に見られ、さらに家元の茶室「燕庵」※と似通うところも多く、つながりの深さがうかがえるとも言う。

※（79ページ下図スケッチ画参照）

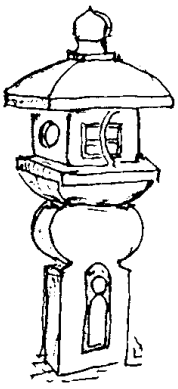
一方で遠州好みと称されるものも玉島には点在する。

古田織部の愛弟子であったという小堀遠州は、積極的に周囲の景観を取り入れる書院風茶室が得意であったという。

関ヶ原役後、備中代官として父と共に備中松山に移住した小堀遠州が各地に庭園や茶室を造り、後世に大きな影響を与えている。

遠州流の影響を色濃く写したものに
円通寺の高方丈……縁で三方を囲んだ八畳二間の書院風茶室
天満町安藤家茶室……八畳・六畳の二室続きで書院を茶室に
矢出町柚木家……酔石・如蘭亭は四畳半に地袋を設け、棚や窓などを多用し装飾的な要素の強調

などが挙げられるという。



織部型石灯籠

此項は「玉島町並み保存計画基本調査報告書」（倉敷市教育委員会）に基づく

藪内紹智・古田織部については玉島今昔物語上巻98ページ参照

(5) 大国屋と川田甕江

写真上は大国屋（現安原家）の表側……左の出入口は住居用
右の出入口は店用
（肥料店・安原倉庫）

写真下は「甕江先生旧宅」碑
昭和四十四年十二月 建立（右側面）
川田甕江遺徳顕彰会（左側面）

写真の右に続く壁面は写真上の住居用出入口のすぐ左側に面する壁である。
駐車場と化した一角に碑が建立されている。

大国屋（川田甕江生家）

江戸時代中期（一八〇〇年頃）の建物で綿廻船問屋の店舗として使用されていた。

当家は川田甕江の生家であり、氏は和歌を小野務に学び、儒学を鎌田玄渓に学ぶ。

板倉勝静将軍慶喜に従い江戸に至る。

明治五年三島中洲と共に「二松学舎」を起した。

玉島事変で熊田恰の自刃に際し、玉島を戦火から守り、部下の助命嘆願書を備前藩に提出する草案を作った。

維新後、東宮侍講などを務めた。貴族院勅選となり、東大の教授、宮中顧問官などになられた。

（新町ルネッサンス振興会）

▲川田甕江略伝▼

「天保六～明治二九（一八三五～九六）」漢学者

名は剛、通称剛介、字毅卿。初め和歌を長尾村の小野務（通称本太郎、字伯本、号蘇庵、柿園、丹波亀山藩用達・小姓格・禄五十石）に学び、備中松山藩校教授鎌田玄渓に入門。藩士に推挙され昌平黌で学ぶ。山田方谷の推薦により藩主板倉勝静の儒臣となる。鳥羽伏見の変で朝敵の汚名を受けるに及び変装して上京、大政官に上書・哀訴嘆願して藩の嫌疑を解き、復封・板倉家の存続に努力した。

「探訪記巻之弐 羽黒山をめぐる前編」「玄渓鎌田翁碑」の項を併せ参照

酒・若屋本家

当家は江戸中期享保二年（一七一七）より代々酒造業を営み、備中玉島の銘酒玉美人で知られ、多くの文人墨客が来遊した。玉美人記念館は当時の繁栄を物語る文化を今の世に伝えている。

（新町ルネッサンス振興会）

山本氏ハ生国播磨産ニテ君公伊東丹後守長實公御入国当時、御座船ノ支配也シヲ武士ニ御取立召抱ヘラレシ事ト承ハル勇気義心ノ人ト申伝也。其弟ハ民間ニテ浅口郡阿賀崎村湊ニテ播磨屋ト家号ヲ申姓モ山本ト申シ今世旧家歴々也。右之由緒故岡田侯御用荷物東武大坂其外運漕支配ヲ累年致ス今世ハ外方ヘ支配引替リ古ノ形絶エタリ

（下道郡服部村庄屋 水川家文書より）

江戸時代初め元和二年（一六一六）三月備中下道郡岡田藩（二万三百石）初代藩主伊東長実入国に当って、大阪より海路船で浅口郡亀山村（旧富田村亀山）の湊に着船上陸。陸路を服部村谷本の仮陣屋に至った時のこと。運漕業を営む播磨の山本氏が故あって船を用立て便宜を図った関係が記録されている。

▼初め若屋山本家との関連を想像していたが、最近、播磨屋山本家の存在を見ることができた。

（84ページ 下表の上段中央）

(6) 若屋（山本酒造）と玉美人記念館

◀ 酒・若屋本家の表の件

玉島の活性化を目指し、街おこし運動の一環として、江戸時代備中地方の交易の中心として栄えた玉島港町を体の中央部にある「へそ」になぞらえて、「備中玉島へそまつり」が企画され、第1回が平成4年夏 新町商店街で開かれた。 この時「酒蔵の中の古美術展」として一般に公開されたのが「玉美人記念館」の始まりであった。 展示品は酒造りに関する品々や港町に来遊した文人墨客が遺した酒にゆかりの書画を主体とする。

▶ 玉美人記念館……江戸末期に建造された酒蔵を改造……百人を越す風流人の作品を収納し、江戸時代の芸術にふれることができる。

「参考資料―旧新町問屋街旧跡」

伝統的町屋の分布位置

（註記）

① 良寛庵（喫茶）……若屋東店の主屋はとりこわされて駐車場となったが、主屋東端の建物の一部が改装されて残った

② 旧「スナック苑」……もと大西屋妹尾氏が設江銀行を開設した店舗という。

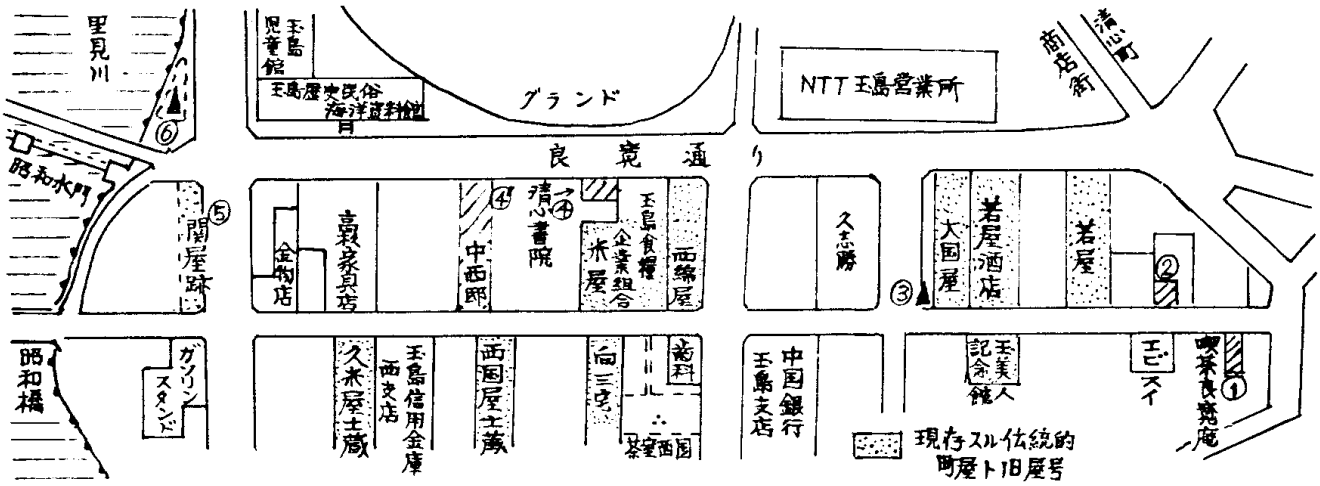
③ 川田甕江生家碑

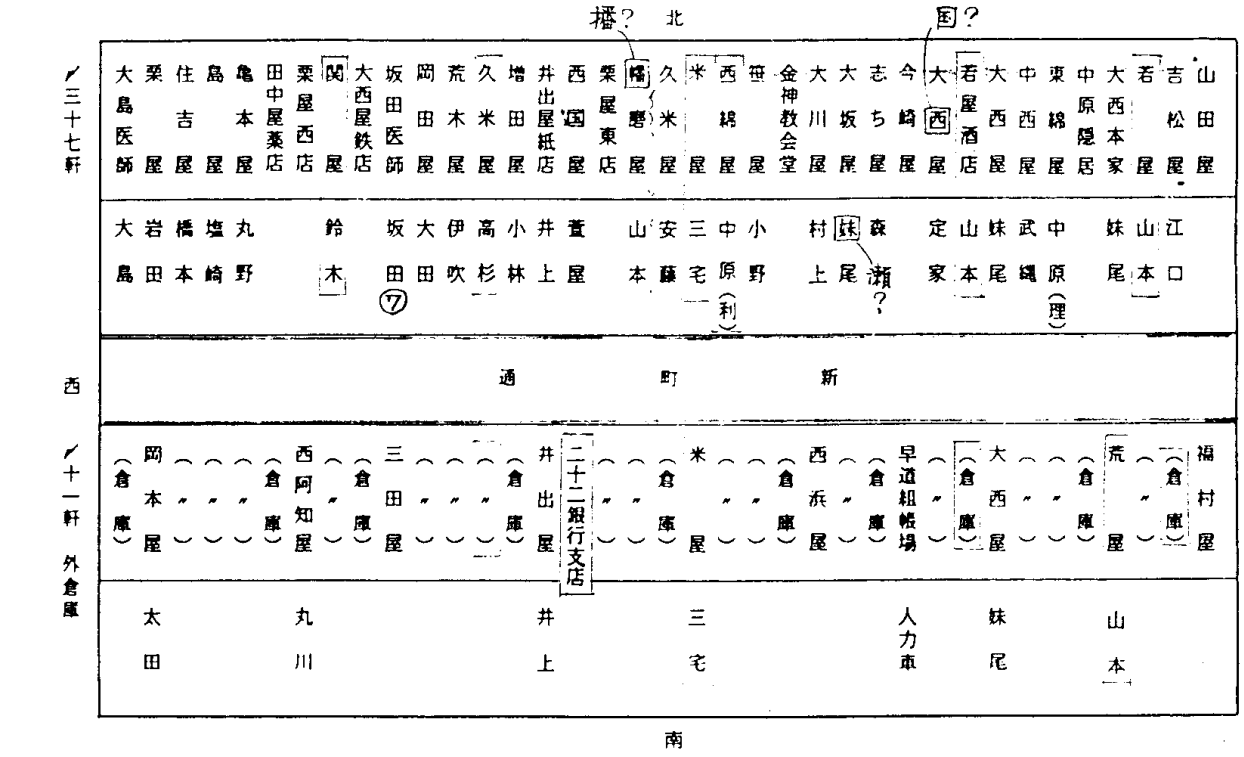
④ 清心書院……かつては舟宿であったともいわれ地階に船着き場を持つ、良寛通りから地階出入口が見える。④中西邸の北側にも船着場の遺構を残す。中西邸も奥行きが長く、大きな離れや中庭が多く典型的な町屋（木造瓦屋造・本瓦葺、厨子二階）

⑤ 旧関屋跡……大半が道路にとられ、僅かに残った敷地内建物は最近全面改装で姿を変える ▼関屋五七伝……玉島今昔物語上巻108～109ページ参照

⑥ 水谷侯遺徳顕彰碑

⑦ 坂田待園……玉島今昔物語下巻 川ページ参照





〔参〕 矢出町 西爽亭

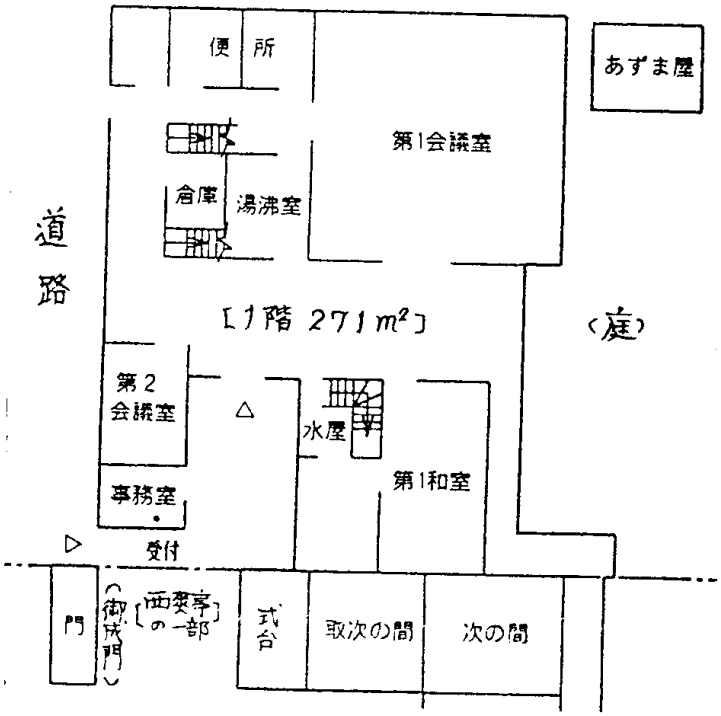
▲平成の改修工事▼

町並み保存事業の一環として倉敷市が柚木家などから土地を買収。建物の寄付を受けて県の補助と合せ約一億三千万円をかけた旧柚木家住宅の改修工事が平成十年十月完了。

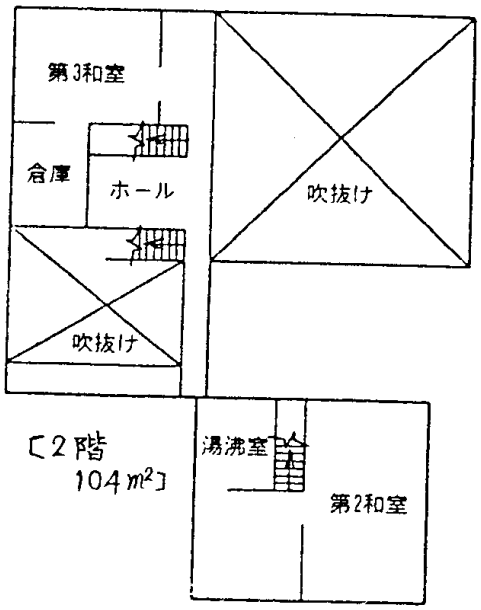
復元された西爽亭は公開施設として開放。

住宅主屋は通りに面した外観は旧形を再現。内部は一部を残して全面的な改装を行ない、生涯学習施設（下の平面図参照）として会議や展示スペースとして一般利用に応える。

西爽亭とは、御成門（薬医門）・式台・玄関の間（取次の間）、次の間・御成の間（上の間）・湯殿・便所（厠・手洗）・茶室及び庭園を指す。↓

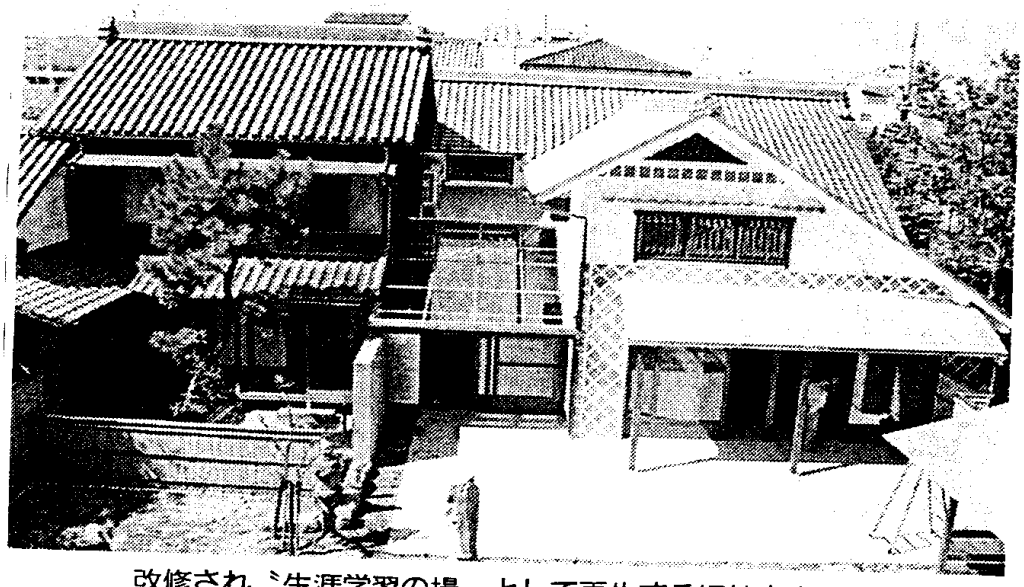


生涯学習施設となった平面図



↘〔84ページ西爽亭平面配置図を参照〕

外観は正面唐破風付で屋根は鬼瓦が飾られた本瓦葺きとなっている。



改修され〝生涯学習の場〟として再生する旧柚木家住宅

改修工事が終った柚木家住宅

上の写真は西爽亭の医薬門……別名 御成門ともいい，江戸時代には松山藩主の来駕の時の出入口であった。 門をはいるとすぐに玄関式台となり、居間へと続く。 内部や庭なども改修の手が加えられている。

下の写真は全面改修により一新した柚木家の母屋……外観は昔日の遺構がしのばれるが，内部は全く一変した。

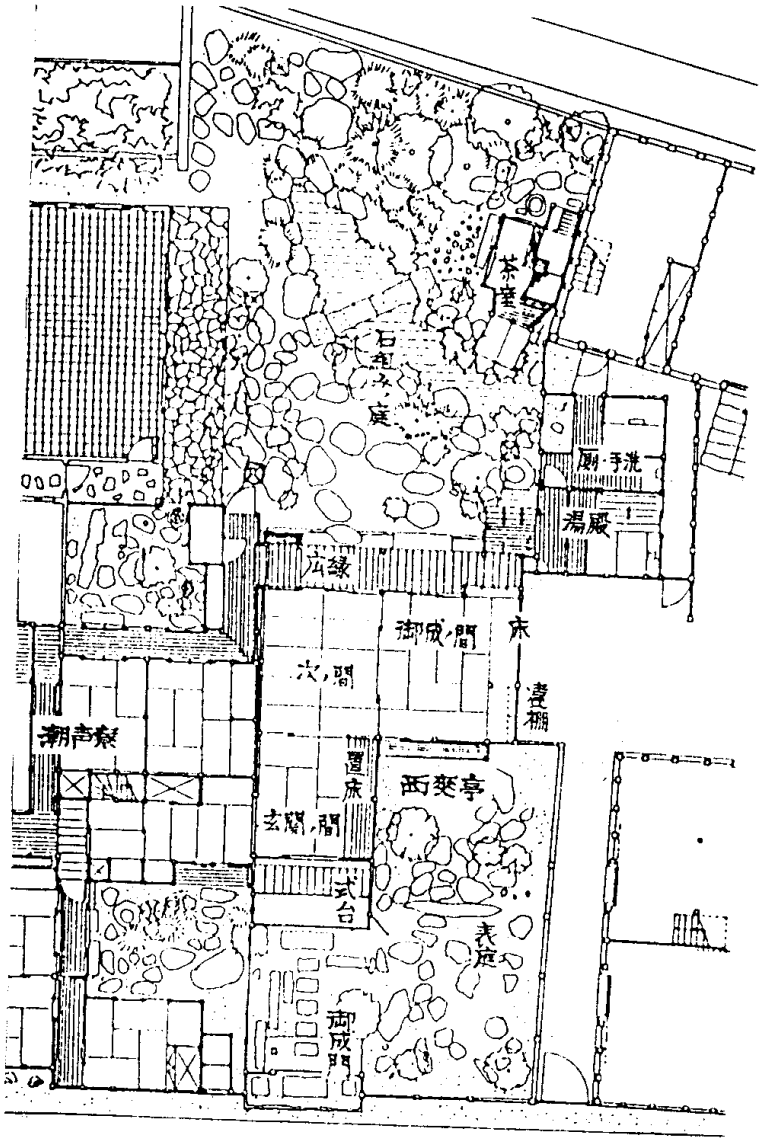
〔御成の間は数寄屋風の手法を交え、床・違い棚・付書院・広縁をそなえた書院造りで構成され、豊富な石組みの庭園と呼応した築造当時の風趣を今に伝えている〕

西爽亭（柚木邸）

本邸は天明年間（一七八一～一七八九年）の建築といわれ、柚木本家、または菅茶山（儒者 一七四八～一八二七年）の命名により西爽亭とも称する。柚木家は代々備中松山藩（現高梁市内）藩主板倉侯に藩の諸役として仕え、藩侯が玉島領内を巡回の際本邸に宿泊するのが習わしだった。

従って本邸は、大名の宿泊施設にふさわしい風格を持った構えと造りと装飾がなされ、また、庭園の石組みにも由緒があり、格別の趣がある。

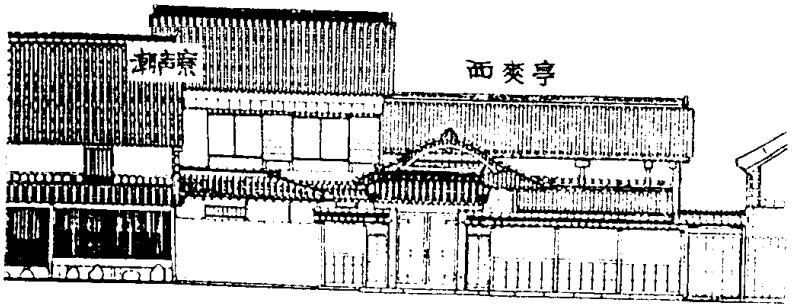
幕末動乱期の慶応四年（一八六八年）鳥羽伏見の戦において幕府方は敗戦し、大坂城にて老中板倉侯護衛の任にあった藩老熊田恰矩芳（一八二五～



西爽亭平面配置図　〔西爽亭建物床面積〕115m²

熊田恰が自刃したのは
次間と呼ばれたところ

介錯にともなう血潮の飛沫跡が
天井などにかすかに残るのが見られる



御成門

西爽亭立面図（表側）

一八六八年）は、藩侯の命により帰藩しようと隊士（一五〇名余）を率いて海路玉島港に上陸するが、備前藩軍兵によって包囲される。

熊田恰は藩の責任を一身に背負い、部下の助命と藩の安泰、戦火の回避を嘆願して、慶応四年一月二十二日、本邸にて切腹、これにより玉島は戦火の災から救られた。

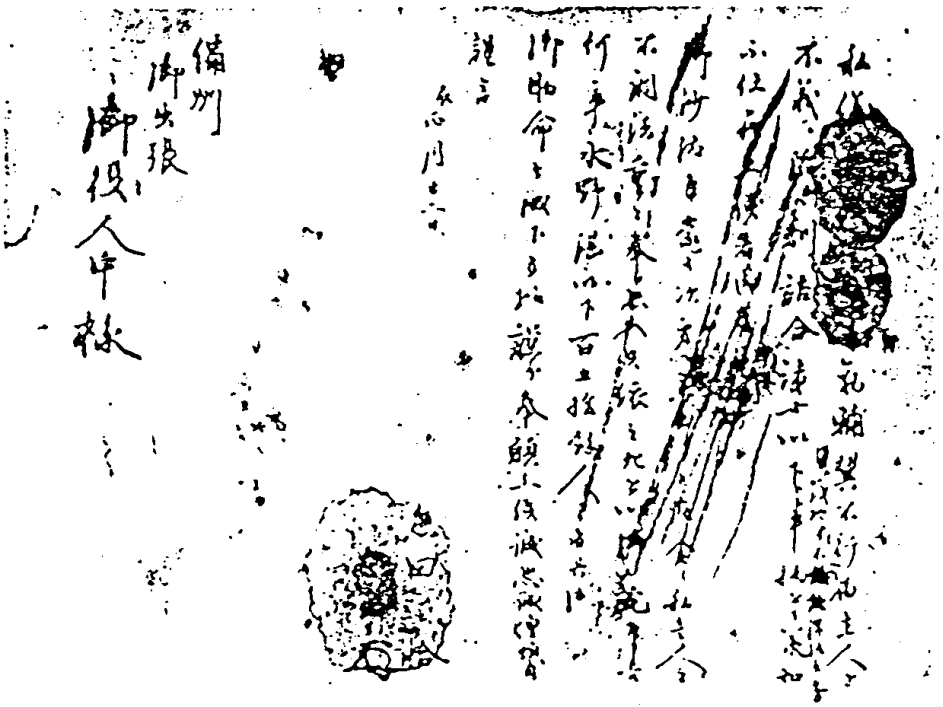
本邸は玉島人にとって忘れ難い維新史の悲壮な一頁をそのまま遺している。

平成二年十一月　　玉島文化協会

◆熊田恰 四三才（慶応三年）のときの写真から模写〔下図〕

▲幼少のころから父に武芸の手ほどきを受け、長じて伊予宇和島で武芸修業にはげみ新影流奥儀を極め、父の死後は跡を受け継ぎ門弟の指導育成に努めたが、恰の人柄を慕って集まる門弟は数百人にも及んだという。戊辰鳥羽伏見の戦に敗れて玉島の柚木屋敷にのがれた百五十名の部下はすべて恰の門で学んだものたちであったという。

■「熊田神社」探訪記巻之弐羽黒山をめぐる後編52・53ページ参照



上図は川田甕江に作らせた歎願書の草案にもとづいて熊田恰自筆の血書歎願書の草稿写

熊田恰……玉島今昔物語上巻126～7ページ参照

玉島騒動顛末記

慶応四年（一八六八）〔明治元〕正月六日鳥羽伏見の戦に敗れた将軍慶喜は板倉勝静ら僅かな重臣と深夜大坂城脱出、軍艦でひそかに江戸へ逃げ帰る。

◆この時藩主護衛の任にあった熊田恰は藩主勝静から帰国を命ぜられた。

同　七日　賊軍故に陸路の通行困難。夜十数隻の小船に分乗、分散して玉島へ向けて脱出。風浪にもまれながら、十二日から十七日にかけて次々と玉島に着き、柚木屋敷にのがれる。

同十一日　勅命を受けた備前岡山藩は家老伊木若狭を総督に征討軍を編成、備中松山鎮撫隊派遣。

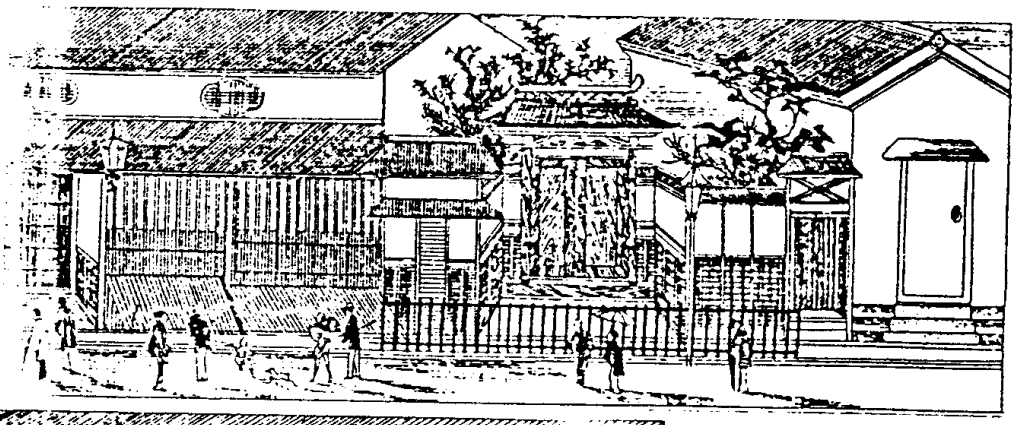
◆同じ頃、別動隊千名程が岡山領浅口郡亀山村に布陣し、玉島征覇に備える。

同十三日　情報収集に奔走した松山藩は情勢の不利なことを察し、総社に進軍した岡山藩鎮撫隊に恭順の意を伝え、帰順書提出。

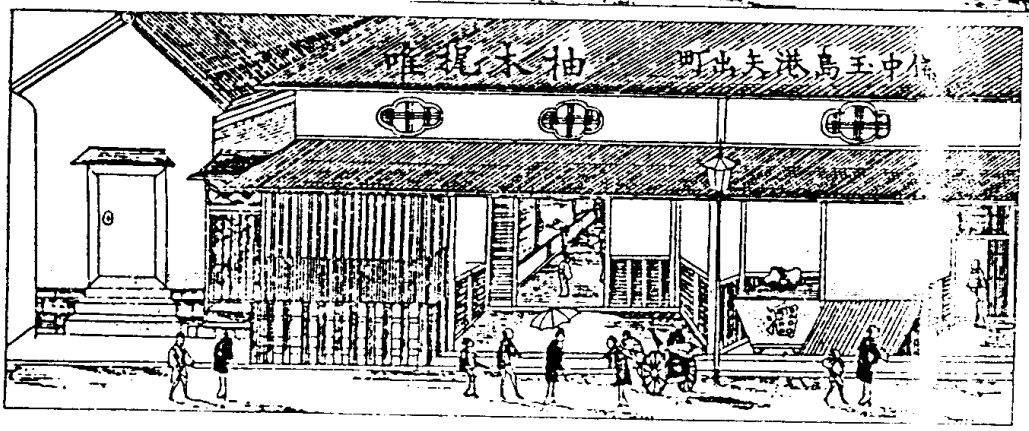
◆このころから亀山村に布陣した岡山藩別動隊は、七島・円通寺・住吉山・円乗院などに大砲を据え玉島港町を包囲した。

同十八日　松山城明け渡し

松山藩士は武装を



明治維新後は一変して荷物運送問屋「ウ柚木正平（棍唯）」と看板を掲げる。（明治中頃の柚木家）



上図の左端と下図右端はつながり、ひと続きとなる。上図右に西爽亭、御成門が描かれている。

解き農家に分散して謹慎。

◆このころから玉島市内の岡山藩兵の巡回警備が次第に厳しさを加える。

併せて鳥羽伏見の戦の敗残兵として熊田恰ら百五十名の引渡し要求が強くなる。

……玉島町民は戸を堅く閉ざし息をひそめて不安の日々を送る。ひそかに戦火をおそれて避難する者も出る。

……このころ新町に皇太神宮のお札が降り、「ええじゃないか踊り」が発生世情騒然となる。

◆柚木屋敷の熊田恰のもとに城地没収され帰国不能、自刃をうながす密書が松山から届く

正月二十二日　部下の助命歎願書を作った熊田恰は、西爽亭にていとこ熊田大輔の介錯で潔よく自刃。時に四四才。

玉島は戦火を免かれた。

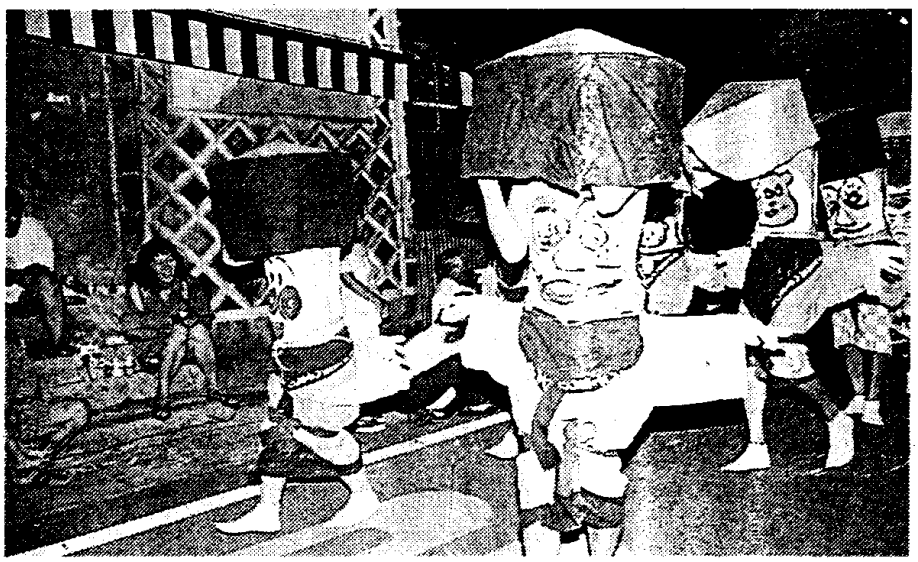
参考資料◀街おこし▶　備中玉島へそまつり

H10.8.30 山陽

ユニークなへそ踊り

玉島でまつり

愉快なへそ音頭に合わせて、おなかに顔を描いた〝へそ踊り〟が練り歩く「第七回備中玉島へそまつり」（新町ルネッサンス振興会主催）が二十九日夜、倉敷市玉島中央町の新町通り商店街一帯で繰り広げられ、県内外から訪れた約一万人の見物客らの笑いや歓声があふれた。



おなかに顔を描き、通りを練り歩く「へそ踊り」参加者＝倉敷市玉島中央町の新町通り

おなかに顔 100人練り歩く

勇壮なへそ太鼓の乱れ打ちで開幕。「ええじゃないか、ええじゃないか、ここは備中どまん中……」。午後七時半、軽快な音頭に合わせて、上半身裸でおなか全体に思い思いの顔を描き、頭に編みがさをかぶり、腰に法被を巻いたユーモラスないでたちの約百人の踊り手が、腰を振りながら白壁の土蔵が残る新町通りに次々に繰り出した。

沿道の見物客たちは、目の前を通る踊り手たちの動きに合わせて表情を変えるおなかの絵を眺め、自分のおなかを抱えて大笑い。子供たちはアニメキャラクターの登場に大喜びしていた。

へそまつりは、江戸時代、物資の集散地として栄えた玉島港周辺のにぎわいを再現しようと、新町地区の商店主らでつくる同振興会が、備中地方の経済の中心地だった玉島を〝へそ〟に見立て、平成四年から毎夏開催している。

参考資料 A 街おこし ▼ 備中玉島へそまつり (2)

地域振興にと 金色夜叉上演

倉敷芸術科学大演劇部

29日に玉島へそまつり 練習に力こもる

倉敷市玉島地区の新町通商店街で二十九日に開かれる夏の恒例行事「備中玉島へそまつり」に、倉敷芸術科学大学演劇部の「劇団Aoi」（土井直樹部長、二十人）が、玉島地区にゆかりがあるとされる貫一とお宮の物語「金色夜叉」と、「一寸・徳兵衛物語」の寸劇を上演することになった。部員たちは二十一日、同大キャンパスで練習を始め、地元の人たちと一緒に地域の振興に役立ちたいと張り切っている。

「へそ」は体の中央部にあり、「ものの中心」「大切なところ」を「へそ」に例えられる。また、玉島地区も江戸時代初期から明治にかけて、備中地方の交易の中心地の港町として栄えたことに、玉島商工会議所の行本博史振興課長（五四）が着目。一九九二年夏、地域の活性化を目指して「備中玉島へそまつり」を企画した。

「金色夜叉」は、主人公の宮が玉島出身の明治の漢学者・川田甕江の次女・綾子と、児童文学者の巌谷小波の恋愛事件を、尾崎紅葉が小説のモデルにしたと伝えられている。今度の寸劇は舞台を玉島の沙美海岸にして、「金色夜叉玉島版」として上演する。

徳兵衛は江戸時代初期、玉島地区の旧家に生まれた実在の人物。大阪に出て、仁義を重んじた任侠人として活躍、玉島で亡くなったとされ墓もある。歌舞伎の「夏祭浪速鑑」にも準主役で登場している。

脚本は二つとも行本課長が書いた。公演はいずれも約十分間。まつりの当日夜、特設舞台で上演する。

「へそまつり」は午前九時から午後九時まで、商店街を中心に約一万人が参加して「へそ太鼓乱れ打ち」や「へそ踊り」など、多彩な催しが繰り広げられる。

同大学演劇部で三年の佐々木竜太郎君（二〇）は「これまで現代劇が中心で、時代ものは初挑戦。がんばりたい」と話している。

まつりを主催する新町ルネッサンス振興会の虫明徳二会長（六六）は「今年は玉島の歴史を発掘した演劇が初上演されるので、盛り上げたい」と期待している。

夏休みを返上して「金色夜叉」などの練習をする演劇部員。貫一を女子が、宮を男子が演じるという＝倉敷市連島町西之浦、倉敷芸術科学大学キャンパスで

H10・8・22・朝日

玉島

へそまつり中止

不況で費用集まらず

倉敷市玉島地区の夏の恒例行事として人気を集めていた「備中玉島へそまつり」が、今年から中止されることになった。寄付金減少など開催費ねん出が困難になったためで、長期不況が影を落とした。

同市玉島中央町が江戸時代に備中地方の物資が集まる中心地として栄えたことから、〝へその町〟と位置づけ、地域活性化のため一九九二年に始まった。おなかに思い思いの顔を描き、腰に法被をまとった踊り手がユーモラスに練り歩く祭りで、毎年八月末、同市玉島中央町の新町通り商店街で開かれてきた。

玉島地区を代表する夏のイベントとして毎回、一万人を超える人出でにぎわっていたが、長引く不況の影響で事業所や町内からの寄付金も集まりにくくなり「十年を区切りに中止を決めた」と主催者で地元事業主らでつくる新町ルネッサンス振興会。振興会の虫明徳二会長は「地域活性化を願った祭りだったが、景気低迷の影響は大きい」と残念がっている。

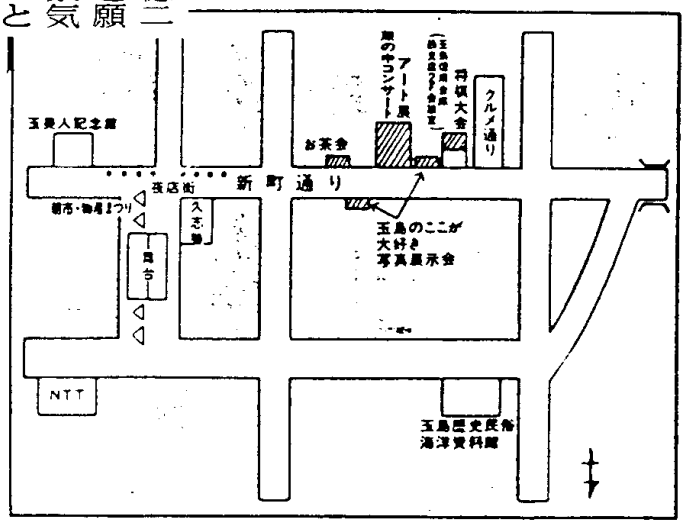
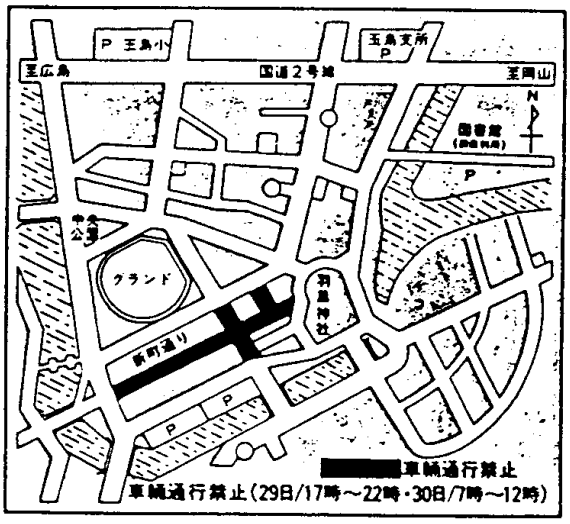
（H14・8・29・山陽）

第1回 備中玉島へそ祭り
平成4年8月29～30日
新町通り

備中玉島へそ音頭

作詞 板谷原寛
浅原英夫
作曲 柚木爽一郎

一、えじゃねえか　／＼　／＼
ここは備中　ど真ン中
良寛さんも　踊り出す
それ行け　／＼　へそ踊り
備中玉島　へそまつり

二、えじゃねえか　／＼　／＼
ここは備中　ど真ン中
徳兵衛さんも　踊り出す
それ行け　／＼　へそ踊り
備中玉島　へそまつり

三、えじゃねえか　／＼　／＼
ここは備中　ど真ン中
源兵平家も　踊り出す
それ行け　／＼　へそ踊り
備中玉島　へそまつり